校長室だより～燦燦～ №４３６

智辯和歌山

2021.10.7

長雨により、何度も順延となったが、夏の全国高校野球選手権大会が、聖地甲子園にて８月２９日（日）まで行われた。決勝戦が行われた日は日曜日だった。同じようなユニフォームで見分けがつかない学校同士の決勝など、なかなか見ることができるものではない。

夏の高校野球の決勝というと、あくまでも主観ではあるが、トーナメントを勝ち上がるごとに成長し、勢いをつけてきた学校と、いわゆる優勝候補、強豪校の対戦というケースが多い。勢いがある学校が、そのまま優勝することもあれば、強豪校が相手の勢いを受け止め、勝つこともある。

この夏は、どうだったのかというと、どちらも勢いがついて勝ってきたのではない。どちらも強いから決勝まできたのである。強い２つのチームが勝ち上がり、決勝戦を行うこととなった。その２校が、今回は兄弟校であり、見分けがつかない同じようなユニフォームだったということである。

試合は、智辯学園和歌山高等学校が、智辯学園高等学校を倒して優勝した。優勝の瞬間をテレビで見ていた。「おやっ」と思った。智辯和歌山ナインが、マウンドに集まって歓喜の輪をつくるという恒例のお決まりの行動をとらない。すぐに、そういうことかと分かった。自然と目頭が熱くなった。

宮坂主将は、優勝インタビューで「相手もいますし、礼に始まり礼に終わるというのがありますので、礼が終わってから喜ぼう」という判断のもとで取った行動だと話した。私は、中谷監督からの指示があったものと思っていた。中谷監督は、次のように話している。

時代の流れがあるので、この状況で集まるのはどうなんだと話したんです。ただ、僕もそうでしたが、甲子園のマウンドで歓喜の輪をつくることに憧れとか夢をもっていたので、選手たちには考えてみるように、とまでしか話していませんでした。

それで導き出した答えがあの行動でした。本来ならマウンドで喜ぶことに憧れがあった選手もいたと思いますが、そこを我慢した選手たちを尊敬しています。

宮坂主将は、今回のことに関して「大会本部からは決まりなどは言われませんでしたが、集まらない方がいいだろう」とチーム全員が納得したうえで№１ポーズを取らなかったそうである。

智辯和歌山ナインは、新型コロナウイルスで我慢をせざるを得なかった世代である。培った心の強さをもって、№１ポーズを自粛した智辯和歌山が優勝の歓喜の輪をつくらない代わりに、人としての成長を示した一瞬だった。智辯学園もすばらしいチームだったが、智弁和歌山は優勝にふさわしいチームであった。高校野球を見ていると、高校生から教えられることが多い。